



## 中国への中期的視点

リーマン・ショック後の世界経済で、圧倒的に存在感を高めたのは中国経済であった。昨年の成長率は10%に迫り、今年も多くの機関が10%近い成長を予測している。現実には、最近2四半期の成長率は、連続して2桁に達した。今後当面の間、中国の高い経済成長が続くと考えてよいだろう。しかし筆者は、2010年代半ばに、中国という国が一つの試練を迎えると考え。決して悲観的な見通しだけを述べるつもりはないが、2015年頃に中国は大きな壁を乗り越えなければならないと考えられるのである。

そのストーリーは次のようなものだ。まず、2010年代半ばまでの成長率は引き続き高く、むしろ一般に認識されている以上に、世界経済の中での存在感を圧倒的に高めていくことを認識しなければならない。中国の通貨人民元のレートは、天安門事件以前、対米ドルで今より約45%程度高いレートであったことを思い出す必要がある。市場関係者の相当部分の人たちは、今後元のレートが、当時のレートを目指して上昇していくと考えている。もしも現状のように10%近い経済成長が継続され、かつ人民元レートが5割近くも上昇すれば、2010年代半ばに中国の国内総生産(GDP)は米国のGDPを超えるという計算になってしまう。現実には、江沢民前国家主席のアドバイザーだったと言われている胡鞍鋼氏(清華大学教授)は、2015年に中国のGDPが米国を超えると予測している。言うまでもなくこれは、地政学的に見た世界の勢力図を大きく変えることになるだろう。

同時に2010年代半ばには、二つのことが中国に起こる。一つは、そのころから中国の生産年齢人口が減少に転じる可能性が高いことだ。これまで中国経済は、労働、資本、エネルギーなどの「要素インプット」を増大させることによって成長してきた。“爆食経済”と称される所以でもある。最近では、次第に技術革新(全要素生産性の上昇)の成長への貢献が高まっているが、それでも人口要因が成長の制約になることの意味は大きい。経済が十分に大きい規模になるが、一方で成長力に陰りが見えてくることが示唆されている。

そこに、もう一つの変化が重なる。政治的指導者の交代である。胡錦濤氏は2013年に国家主席の座を降りることになっているが、その後も軍のトップなどのポストに留まるだろう。結局、胡氏が完全に後任に権力を譲るのは、2015年頃になると考えられるのである。

要するに2010年代半ばの中国経済は、米国経済に匹敵する(もしくはそれを凌ぐ)規模を持つものの、成長力に次第に陰りが見られるようになる。そして、そうした最中に政治リーダーが交代するのである。中国経済の順調な発展がなければ、もはや世界経済の安定はありえない。当面の経済発展に多くの注目が集まる中国…。しかし同時に、2010年代半ばの試練を中国がどのように乗り越えるのかという視点が、今後強く求められることになろう。

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。Copyright©2010 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com